

デンマークに学ぶ

株式会社アンデルセン
代表取締役社長

高木 誠一



日本人にとっては異文化の象徴ともいえるパンをなりわいとしております関係から、その文化の発祥の地であるヨーロッパにはたびたび出掛けます。これまでに多くの国を訪れ、そこで食されておりますパンやそれを食べている人々の暮らしぶりを拝見し、味わい、勉強してまいりましたが、その中で、特に敬愛している国があります。それは北欧の小国「デンマーク」です。

デンマークは人口約530万、ユトランド半島と大小約500の島々を合わせた面積は九州とほぼ同じ約4万3000km²と小さな国ではありますが、自国の人口の3倍を養うことのできる生産力を誇る、世界に名だたる農業国です。

私どもの企業とデンマークとの出会いは、今から遡ること40年、父であり創業者である高木俊介が初めて海外旅行に出掛けたときに立ち寄ったことに始まります。しかし、広島でパン屋を創業した高木は、そこを訪れる前からデンマークに対する憧れのようなものを抱いておりました。以下、本人の口述筆記より抜粋してご紹介します。

『昭和21年の秋、復員してまいりました(中略)。その当時広島は全く瓦礫の街でございました。その時、私に勇気を与えてくれたものが「デンマルク国の話」という、神学者内村鑑三の書いた1冊の文庫本でありました。1864年デンマークは、プロシヤ、オーストリア、ハンガリーの連合軍と戦争をいたしまして、そして敗れ、講和を結びます。自国が持っていた一番肥沃で豊穡な土地ホルスタ

インとシュレスウィヒの2州を割譲されます。後に残ったのは、北方のユトランドの湿地帯だけでありました。国民は戦いに敗れて茫然自失、生きる力をも失っておりました。その時、ユグノー党の熱心なキリスト教徒である工兵大尉ガルカスが復員して参ります。国民の総力を結集して、彼は復興へとリードいたします。いろいろな困難を克服し、やがてこの北方ユトランドは、豊かな森の国、緑の美しい農地、牧草地帯へ。そして酪農を興し、商業を発展させます。海運国となります。また有数の商船隊も持ちます。そして各地に木工業あるいは精密工業なども興って参ります。そして40年、敗れたデンマークは小国であっても、大国に負けない経済力を持つにいたりました。そしてこの本の出版された当時、国民1人当たりの富は、戦いに勝ったドイツ国民よりも、英国人よりも、米国人をもしのぐ富を持つにいたったのであります。国は戦争に敗れても亡びません。実に戦争に勝っても亡びた国は、歴史がこれを証明しております。国の興亡は戦争の勝敗に依りません。国民の平静の修養に依ります。善い宗教、善い道徳、善い精神ありて、国は戦いに敗れても衰えません。この内村鑑三の話は、当時の日本の状態と二重写しになりました。それがデンマークへの憧れの発端となりました。』

1959年、初めて訪れた憧れの国デンマークで、創業者の高木はデニッシュペストリーというパンに出会います。パン生地とバターの薄い層が幾重

にも折り重なり、サククリとしてしかも口中ではとろけるような味わい、初めて出会ったその美味しさに感動し、なんとかこの本場の味を日本のたくさんの方にも味わっていただきたい、とデンマークから技術者を招聘したり、日本の技術者をデンマークに派遣したり、研鑽を重ね、日本で初めてデニッシュペストリーの商品化に成功、また多くのお客様に焼きたてのペストリーを、との思いから、冷凍パン製法を開発するなど、デニッシュペストリーは会社をグイグイ引っ張ってくれる偉大な牽引力となりました。

しかしデンマークに教わったことは単にパンのみではありません。デンマークで暮らす人々の生き方、考え方こそが企業の真のお手本となっております。「たくさんモノを持つよりも、よいモノを持つこと」を重んじ、何よりもまず、自分自身の日々の生活のクオリティを高めることに積極的で、「本当によいものを必要なだけ」というデンマークの人々の姿勢は、少なからず「規模の大小如何ではなく、商品と人のクオリティを追求し、企業のポリシーが受け継がれる会社」でありたい、わが社の生き方の指針となっております。

近年は、福祉国家あるいはエコロジカルな国として日本でデンマークが注目されてきております。たくさんの方々の日本の人々がデンマークのことに興味を持たれ、その地に赴かれることを私は大変うれしく思っております。この国のすばらしさは、現地で、デンマークの人々とふれあうことで実感していただけたらと思っていますからです。

デンマークを訪れてまず最初に目を惹かれるのは、モビールやキャンドル、花などで美しく飾られた家々の窓辺、しかも通り側から見て楽しめるようにそれぞれの家で工夫されています。少しでも多くの人に楽しんでもらえるように、との配慮でしょうか。

首都コペンハーゲンの真中にある遊園地チボリ

公園に行けば、子供たちを連れた家族連れから、季節の花々が香る日だまりの中でゆったりと語り合う仲のよい老夫婦まで、ゆっくりとした時の流れを楽しむ姿があちらこちらに見受けられます。そこは決して若者が占有するスペースではなく、あらゆる人々が共にくつろぐ場所です。

ある友人を訪ねると「この街で一番おいしいレストランにご案内しましょう」と言われ、案内されたところは何とそのお宅のダイニングルームだったというエピソードもあります。奥様への愛情とユーモアにあふれたそのおもてなしに、旅の疲れも癒されました。

私を惹きつけてやまないもの、それはデニッシュ・スピリッツとでも申しましょうか。長く厳しい冬、荒々しい強風、やせた土地、そのような自然環境の中でも決して卑屈になることなく、常に前向きに、限られた資源や厳しい環境を逆に有効に利用する人々の智慧。それが、品質の高さと生産力を誇る畜産業、機能性やデザイン性に優れた家具・装飾品、デンマークを代表する動力源である風力発電などを育んできました。そしてもう一つ、デンマーク語の「Hygge (ヒュッゲ)」という言葉で表現される人々の気持ち。人と人とのふれあいから生まれる心あたたまる、居心地のよい雰囲気、という意味で、「Hygge」のある暮らしこそが彼らにとっての「クオリティ・オブ・ライフ」といえるでしょう。

同じように戦争に敗れ、復興をとげた日本とデンマーク。しかし、今2国が歩んでいる道は少し違っているように思えます。恵まれた気候風土、モノがあふれる日本。今こそ日本が大切にしなければならぬのは、逆境をもプラスに変えるたくましい精神力と、「Hygge」を大切にすることではないでしょうか。

私自身、これからもデンマークをお手本に、生きることのクオリティを追求していきたいと思っております。